

新編 ピブリオテカ 澁澤龍彦
胡桃の中の世界

一九八八年二月一日印刷
一九八八年二月一〇日発行

著者 © 澁澤龍彦

発行者 高橋孝彦

印刷者 田中昭三

発行所 株式会社白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四

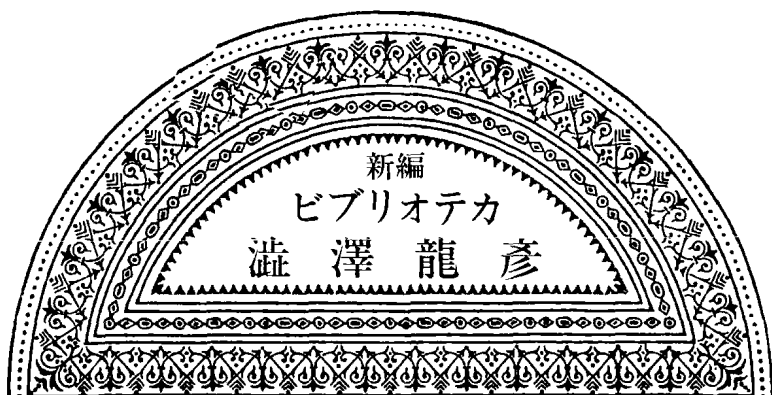
電話 営業部〇三(三)七八一一
編集部〇三(三)七八二一

振替 東京 九一三三二八

郵便番号 一〇一

理想社印刷・黒岩製本

ISBN 4-560-04537-2



装幀
野中ユリ

目 次

石の夢

プラトン立体

螺旋について

『ポリフィルス狂恋夢』

幾何学とエロス

宇宙卵について

動物誌への愛

紋章について

9

26

46

63

82

97

115

132

ギリシアの独楽

怪物について

ユートピアとしての時計

東西庭園譚

胡桃の中の世界

あとがき

解説（中野美代子）

227	225	209	194	176	163	146
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

胡桃の中の世界

石の夢

プリニウスの『博物誌』全三十七巻のうちで、私のもっとも好んで繙読するのは最終巻、すなわち宝石を扱った第三十七巻である。なぜ宝石の部が最終巻に置かれているのかというと、著者の言によれば、自然の崇高さがいちばん高い段階で現われているのは宝石においてであり、宝石こそは自然の美しさの要約だからだという。

おそらく、今日の忙しい世の中で、プリニウスにつき合うほど無用の暇つぶしに似た読書はあるまいと思われるし、私にしたところで、このローマの文人の筆になる、科学的真実とはほとんどまったく縁のない、おびただしい雑然とした奇事異聞の寄せ集めに、いちいち丹念につき合っているほどの余暇には必ずしも恵まれているわけではないのだが、最近出た羅仏対訳のベル・レットル版を気ままに開いて、今日の要求とは何の係りもない記述をそこに発見するのは、それが無用であればあるだけ、あえていうならば、なにか秘密めいた読書の愉悅をおぼえしめるということも事実なのだ。ヴァレリー・ラルボーがいったように、読書とは「罪のない悪徳」なのかもしれない。

ところで、その第三十七巻「宝石」編の三つ目のエピソードに、次のとき記述のあるのが私の目にとまった。

「次いで噂に高いのは、ローマ人と闘ったピュロス王の宝石である。それは一個の瑪瑙^{めう}で、その表面には九人のミューズと豎琴を手にしたアポロンのすがたが見える。ミューズたちはそれぞれ持ち物をもったすがたで描かれているが、これを描いたのは人間の手ではなく、自然に生じた宝石の石理^{いり}が、そのような形に見えるのである。(以下略)」

宝石の切断面に、いろいろな物の形が見えるというのは、必ずしも世に珍しいことではないらしい。『和漢三才図会』の「馬腦」の項にも、「其ノ中ニ人物、鳥、獸ノ形有ルモノ最モ貴シ」とあるところを見ると、こうした現象は西洋ばかりでなく、わが国でも昔から知られていたということになる。むろん、自然が石の表面に意味のある形象を描くわけではないので、これを意味のある形象として捉えるのは、もっぱら人間の想像力、いわば「類推の魔」であろう。石の表面、と私は書いたが、むしろ石の誕生と同時に石の内部に封じこめられ、隠されていた形象が、人間の手で二つに切断されるか、もしくは磨かれるかして、偶然に表面に浮かびあがってきたもの、と考えた方が真相に近いだろう。偶然によって、類似の奇蹟は陽の目をみたのであり、奇蹟はひとたび生ずるや、專制的な力でひとびとの想像力を固定させてしまうのである。あたかもロールシャッハ・テストの図形が、ひとたび私たちの目に「花」として知覚されるや、もうそれ以後、どうしても「花」以外のものには見えなくなってしまうようなものだ。こうして、無意味な形象が夢の世界の扉をひらく。

鏡の中におけるように、石の表面にイメージが浮かびあがる。ガストン・パシユラルが『大地と休息の夢想』のなかで述べたように、「存在のあらゆる胚が夢の胚となる」のである。

「もし君がなにか風景を描かなければならない時に、さまざまな種類の石でできている汚れた壁を眺めたとすれば、君はその壁の上に、変化に富んだ山、河、岩、樹、野原、谷、丘などを見出すだろう。場合によっては、そこに戦闘の場面、ひとびとの激しい動き、奇妙な顔の表情、服装、その他あらゆるものを見出すことができるかもしれない」とレオナルド・ダ・ヴィンチはその『手記』（フランス学士院所蔵）に書いた。この文章をそのまま引用して、自分が同じような幻覚的な体験から、フロッタージュの技法を発見した経緯を説明しているのは二十世紀の画家マックス・エルンストである。「絵のある石」に古代人が見出した感興も、たぶん、これらの画家たちの偶然による発見の喜び、アナロジの喜びに近いものだったのではあるまいか。

*

「絵のある石」については、J・バルトルシャイティスの『錯覚、形態の伝説』（一九五七年）とロジェ・カイヨワの『石が書く』（一九七〇年）とが、私たちにさまざまな興味深い情報を提供してくれる。古来、人間が石に託してきた夢想のいかに大きく、いかに偏奇をきわめていたかということの一端が、これによって明らかとなるだろう。

中世の石譜にも、私が最初に述べたプリニウスの「ピュロス王の宝石」のエピソードは、そのまま引用されていることが多い。ただ、その産地は主としてインドとされた。中世の石譜のなかでもっとも名高いのは、レンスの司教マルボードの『石譜』であろう。東方の伝説と、聖書に基づいたキリスト教的伝統とを融和させ、そこに寓意を見出し、すべてを神の力に帰一させようとしている点では、当時の動物誌も本草書も石譜も、すべて同じだと考えてよい。アルベルトゥス・マグヌスの書では、「絵のある石」の形成される原因として、とくに星の影響が指摘されているが、これはやがて占星学としての体系に組みこまれて、魔術や錬金術の隆盛するルネサンス以降の精神的風土とむすびつく。ポムポナツツィやカルダーノのような自然哲学者も、スカリゲルやアグリコラやゲスナーのような人文学者、鉱物学者、博物学者も、それぞれ「絵のある石」に関する記述を残しているし、その発生する原因なるものを彼らなりに説明している。それは必ずしも自然科学の発展の方向と一致せず、ますます奇怪な魔術的象徴の方向に走ってゆく傾きがあった。

ルイ十三世の宮廷司祭であり、リシュリユー枢機卿の司書であり、かつまた当時の並びなき東洋学者であつたジャック・ガファレルの『ペルシア人の護符彫刻に関する奇聞』（一六二九年）は、この方面のもっとも驚くべき述作と称してよいだろう。その大胆な占星学的教説は、ソルボンヌ大学から一部の訂正を要求されたほど、異端的な匂いのするものだったらしい。パラケルススの占星医学の影響を受けていたガファレルは、その龐大な著作の第五章で、不思議な「ガマエ」*gamahé*なる石について論じている。「ガマエ」はすでに、パラケルススの『明智の哲学』第一部第六章に出

てくる名称で、この著者によれば、天の精霊がみずから刻んだ石であり、あたかも貯蔵瓶のように、その中に天体の力や効能を集めておくことのできる一種の靈石であった。医師は、この「ガマエ」の中に貯えられた力を患者に注いで、容易に患者を治療することができ、肉体の病氣ばかりか、悪魔憑きや不信心のような、精神の病氣をも回復させる効能がある。つまり一種の護符であるが、ガファレルは、これを「絵のある瑪瑙」と同一視しているのだ。寶石の護符に對する信仰は、古くアレクサンドレイアのグノーシス派に發したもので、中世の石譜の伝承と結びついて、パラケルススの時代には非常な流行を見たという。あのフィレンツェのフィチーノでさえ、物体のなかに普遍的靈魂の一部を収集し得ると考えていたというから、当時における魔術的思考の隆盛ぶりたるや、まさに驚くべきものがある。

当時の自然哲学的な考え方によれば、石や鉱物は生きているのであり、地下で成長したり、病氣になったり、老衰して死んだりするのである。だから星の影響も受けるし、周囲の土壤の影響も受ける。「黄金は土中で松露のように熟する。しかし完全な成熟に達するためには数千年が必要である。身も心も地下生活に捧げた鉱物学者は、河床の黄金よりも深い坑の中の黄金の方に値打があると考え」と書いているのはガストン・バシユラール『大地と意志の夢想』である。鍊金術に對して懷疑的であつたベルナール・パリツシーでさえ、あらゆる地上の果実と同様に、鉱物もまた熟するものであり、完全に熟すれば美しい色に変わる、と信じていたらしい。パラケルススによれば、長く土中に埋もれていた異教徒の古銭は、だんだんと石に変化してしまう。金属の生育にふさわしい、

好適な鉱物的環境に置かれていなければ、その性質を悪化させてしまうのである。——ガファレルの「ガマエ」もまた、星と感応し、星から降り注ぐ光線を吸収して成長する、生きた靈石だったのであろう。

「絵のある石」は、最後に十六世紀および十七世紀に輩出した二人の大博物学者によって、ほぼ完全に記述され、完全に分類された。その一人はボロニア大学教授のイタリア人ウリッセ・アルドロヴァンディであり、もう一人は、これまでに私が何度か紹介したことのあるスイス生まれのイエズス会士、ローマ大学教授のアタナシウス・キルヒヤーである。

アルドロヴァンディの鉱物学の書『金属の博物館』（二六四八年）は、著者の死後、アムプロシニの校閲と増補を経て刊行された。すでに中世および近世の学者によって言及された多くの「絵のある石」の例に、さらに新発見の例が追加されている。たとえばヴェネツィアには、すでに大アルベルトゥスの本に紹介されている「王冠をかぶった王」や、ガファレルの書に出ている「磔刑のキリスト」の形をした石のあることが知られているが、そのほかにも「森の人間」、「鳥」、「魚」などの形をした石があるという。バルトルシャイティスの『錯覚』には、こうした例がいちいち挙げてあるが、いたずらに煩瑣になるばかりだと思ふから、ここでは省略することにしよう。要するに、ヨーロッパ各地で発見された、ありとあらゆる物の形に見える石の例が、細大洩らさず、網羅的に引用されているのだ。しかもそれらの石は、「ピュロス王の宝石」の場合とは違って、もっぱら大理石、あるいは大理石に近い珪石、碧玉などである。「フィレンツェ大理石」と呼ばれたトスカナ地

方特産の大理石に、とくに廢墟の風景などの見える珍しい種類のものが多いことは、当時の石の愛好家には、よく知られた事実だったようである。

アルドロヴァンディは畸形学の専門家で、その方面の著書も多く、そこに挿入されたおびただしい挿絵には、十六世紀当時の博物学書のほとんどすべてがそうであるように、奇怪な空想的な人間や動物が満ち満ちている。この『金属の博物館』も挿絵入りで、本文よりも挿絵の方がはるかにおもしろい。例によって空想的で、そのために客観的眞実性は犠牲にされているような趣きがなくもない。たとえば「鯖まほの形の大理石」などという項目を見ると、細長い魚が二匹、頭と尾とを反対方向に向けて、まるで占星学の魚座の記号のように並んでいるのである。ちなみに、この空想的な博物学者は、「自然のイラストレーター」という渾名あだなで呼ばれていたという。

アタナシウス・キルヒャーは、この先輩学者の業績と、ボロニア大学内に設けられた、その博物館とに大いに刺激されて、みずからの博物学の体系を築きあげた学者である。先輩学者に輪をかけた空想家で、しかも自然に対する限らない好奇心に満ちた、驚嘆すべき十七世紀のエンサイクロペディストであった。一六六四年にアムステルダムで刊行された『地下世界』は、それまでの多くの資料を集大成しているが、それだけではなくて、広範な一つの宇宙開闢かいびやく説となつているところに第一の特徴があった。キルヒャー独特の筆触で描かれた地球の断面図が挿入されていて、それを眺めると、地殻の内部で燃えている火は、細い運河のような数多の裂け目を通り、火山となって地表に噴出している。鉱物も金属も、この燃える地殻の内部から自然に生じることが示されている。